

# 「全社員が笑って働ける」企業を目指す 国内唯一の段ボール加工用刃物専門メーカー

## 近畿刃物工業 株式会社

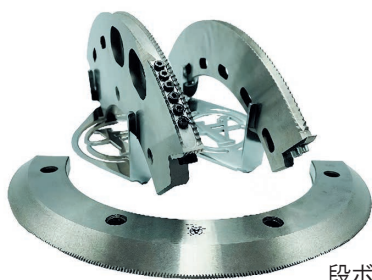


1960年創業の近畿刃物工業株式会社は、大阪府守口市に拠点を置く紙器・段ボール加工用刃物及びその関連部品の専門メーカーであり、設計段階から研磨仕上げまでをワンストップで手掛けています。

今回は同社の代表取締役社長、阿形清信様に経営にかける思いを伺いました。

### 段ボール加工用刃物専門となるまで

当社の創業は1960年5月31日、物流用の梱包材として木箱から段ボールが使われるようになるその過渡期に、段ボール加工用刃物の製造を始めました。愛媛の宇和島から刃物職人を招いて技術を培い、段ボール加工用刃物の他、顧客が求めるさまざまな刃物の製作に取り組んでいました。しかし顧客の要望に沿った刃物をいろいろと作り続けるなか、「これでいいのか？」という問題意識もありました。というのも、顧客の要望にそって「何でもできる」というのは、「何にもできない」と言い換えることもできたからです。そこで段ボール刃物専門とすることで自社事業の付加価値を高め、「段ボール加工用刃物といえば近畿刃物工業」と言われるまでになりました。



段ボール加工用刃物

### 失敗を乗り越え新技術と工程改善を追求

私は、入社後すぐに当時大阪市西区にあった大阪府立工業技術研究所（現：（独法）大阪産業技術研究所）にて、一年間技術委託生として研究職員の近くでこれからの加工技術を学んでいました。その際に受けた忘れられない一言があります。「何ができるか、どうやったらうまくできるか、という思考を常に持つ」というものです。現在のワンストップで一貫内製化を成し遂げるまで、常にこの言葉を念頭に置き改善活動に魂を燃やしました。

ただ工程改善に取り組むなかで大きな失敗も経験しました。それはマシニングセンタを導入した時のことです。当時マシニングセンタは「人は必要ない」という触れ込みで販売されており、私たちもそれに注目し、工程自動化を目的として導入しました。しかしその当時、当社にはマシニングセンタに精通したオペレーターがおらず、社内の少数の人間で暗中模索のなか、マシニングセンタの活用に関して思案をめぐらせていました。そのうち、結局日常業務が優先となってしまう、それに携わる人員も次第に減っていき、いつしか最新のマシニングセンタもただの置物となってしまったのです。この失敗に私は「最新技術だけを導入してもダメなんだ、それを扱う“人”がいてこそなんだ」と痛感したのです。

以後、技術や設備を導入する際は常にそれを扱う人材も登用し、社内でも育成できる環境を整えるよう努めました。技術を扱う人的資源が盤石となってこそ技術は価値を生み出すのです。



レーザー加工機

### 「売る」のではなく「頼られる」営業

かつては「作れば売れた」時代であり、大した努力をせずとも会社はやっていけました。しかし「このままではまずい」という危機感があり、外部からコンサルタントを呼び営業力の強化に努めました。



代表取締役社長 阿形 清信 氏

## 近畿刃物工業株式会社

事業内容：紙器・段ボール加工用刃物製造

本社：大阪府守口市大日町3丁目33-12 会社ホームページへリンクします

創業：1960（昭和35）年6月

社員数：41名



その際にコンサルタントから言われた言葉が心に残っています。営業の指導を受けていたとき、その方が「御社の製品はどこで売っていますか？」と聞くのです。「どこにも売っていません、我々が売りに行くのです」と答えると、「品物がないと誰が困るのですか？」とさらに聞いてきます。我々が「お客様です」と返すと、「御社の製品がないとお客様が困るのに、なぜわざわざ売りに行く必要があるのですか？」と言うのです。そこで私ははっとしました。この先世の中が変わっていくなかで、最終的に生き残るのは「人に必要とされる企業」なのだと思ったのです。ですので、当社は段ボール加工用刃物を通じて、「近畿刃物工業なら頼りたい」という気持ちを持ってもらえるよう、ものづくり企業としての価値向上に努めてきました。



### 大切なのは「従業員の笑顔」

#### 頼られ、尊敬される企業づくり

昨今では社会の善悪の基準が昔と変わり、人の価値観もずいぶんと変化しました。終身雇用はもはや崩れ去り、転職が当たり前となった時代において、多くの企業が若手の確保に苦心しています。しかし私からすると、「従業員が笑って働ける」ことができればそのような悩みはすぐに解決できると思うの

です。会社のカラーを明確にし、従業員がそれに賛同してくれるのなら自然と人は定着します。逆に合わなかったならばその人は辞めていきますが、その際に少しでも「辞めなきゃよかった」と思わせられるような会社づくりを目指しています。

「利益のために従業員を酷使する」「決断すべき立場の人間が決断を放棄する」そんな光景をちらほら見かけますが、そんなことをしていたら人が離れていくのも当然です。なぜなら、今の世の中に必要とされる会社でなければ生き残ることはできないからです。「昔は良かった」なんていう人もいますが、私からすればそんな人は当時のビデオでも繰り返し見ておけ、と思うのです。

人にとって頼ることができる存在というのは非常に重要です。私自身、39歳の時に心筋梗塞で生死の境をさまよった際、頼れる家族の存在の大切さを実感しました。だからこそ私は「どうやったら従業員が笑ってくれるだろう？」ということに関して常に思案しています。一緒に働いてる人間が楽しくないと私も楽しくないのです。「顧客にとっても従業員にとっても、頼れる、尊敬できる存在」。企業というものはかくあるべきです。



—貴重なお話をいただき、ありがとうございました